時評

震災後の日常詠

藤島秀憲

八月号の時評で批判的に取り上げた長谷川櫂の『震災歌集』、印税は被災者に義捐金として寄付されるという。そのことが控えめに最終ページに書かれている。原稿を執筆した時、完全に見落としていた。後になって気がつき動揺している。『震災歌集』の一首一首の完成度は極めて低く、話題につられて買ってしまい失敗したと思っている。だが、私の払った金額の一部が被災地の役に立つとしたら、満更失敗だったとは言えない。一方で、批判的文章を書いたことで、売り上げが幾分でも減ったとしたら、寄付の邪魔をしたわけである。もし、寄付を知っていたら、私は批判的文章を書いただろうか。書けなかったような気がする。被災地への寄付という大義を前に、私の批判精神は萎んでしまっただろう。私の言葉は金に負けたということである。

「歌壇」七月号の特集は「日常詠の味わい」。日常詠というと定義は曖昧で、一体どこまでを含めたらいいのかそもそも分かりにくい。久々湊盈子が「生活のなかから生れる短歌はすべて日常詠ということになるのだろうが、ここではことに日々の平凡な暮らしの味わい」と書いている。私もこの論に賛成で、何も起こらなかった一日の、本人でしかわからない小さな喜怒哀楽をスケッチするのが日常詠だと思う。

・中元に錦松梅を送ること四十年を讃へるべきや　池田はるみ「歌壇」七月号

・六畳の部屋傾くもそのままに寝るなり妻を上座に据ゑて　中根誠「短歌研究」七月号

・東北の雀がいるかもしれぬから残りし飯を芝の上に置く　柳澤桂子「短歌」七月号

錦松梅は佃煮風の高級ふりかけ、贈答に使うことが多い。中元は年に一度、日常とは言えないのかも知れないが、四十年も続いていれば既に日常の一コマ。もらうほうも錦松梅をごはんにかけて食べるのが、夏の朝の日常風景になっているはず。結句の「や」は詠嘆。ああもう四十年かと自身で驚く。送る相手を仲人と読んだ。錦松梅が夫婦の歴史につながる。

二首目、震災前は夫が上座だったのだろう。震災で夫婦の立場が逆転したことの比喩とも読める。混乱時の妻の働きは素晴らしく、妻に一目おかざるを得ない今の自分を劇画的に描いた。

三首目、民話的な雰囲気が楽しい。作者名を読み込んでみると、病床にある作者が弱いものにむけるやさしい視線を感じる。日常詠は作者名と一緒に読んだほうが断然に味わい深くなる。歌の味は作者の味であったりする。

現在盛んに詠まれている震災の歌は、やがて日常詠として歌われることになるのだろう。当初非日常的であった暮らしも、時間が経過するにつれ日常化してゆく。避難生活を続けていて未だ日常とは呼べない生活をしている方もいるのだが、被災した人も、しなかった人も震災後の生活が日常となってきていることは間違いない。ただし、生活に、心に、震災の影響があるかぎり、日常詠から震災の影を払拭することはできない。